

主 題：揺るがされぬ生涯を送るために 3

聖書箇所：ピリピ人への手紙 4章6節

「平安」ということばを辞書で引いて見ました。「心身、国家、社会などが無事で穏やかなこと」と定義されていました。今の私たちの社会、私たちの周りをこの定義に当てはめるなら、私たちは平安をもつことができないのではないかと思います。様々な悪いニュースが毎日のように私たちの耳に入ってきます。私たちはいつ自分の身にそのような悪い出来事が襲ってくるのか考えずにはおられません。昨日、うちの子どもが100円ショップに行きたがり、何が欲しいのかというと、簡易警報器というピンを抜くとすごい音がするものです。幼稚園に来ている子どもたちが何人か持っているので自分もほしいと言うわけです。今、子どもたちも危ない、ショッキングなニュースは彼らの耳に入り、その映像は子どもたちの頭に残るのです。先日、タイで日本の津波警報システムの緊急講習会を行なったところ、その会場には入りきれないほどの人が集まったと、すでに経験して次にまた起こったら困るからです。明日1月17日は阪神大震災から10年目の日、いつまた同じようなことが起こるかもしれないと思います。日本の経済はいつ破綻するのでしょうか？そのようなことを考えて心配する人たちもいます。いったいどれだけ私たちのいのちは与えられるのか、いつ健康が奪われるかもしれない、家族はいつまで安全なのだろう？と考え不安を抱くということは、今、日常的にこの社会で見られることです。実際に、私たちの生きている人生においてははっきり起こると分かっていることは非常に少ないのです。何が起こるか分からない、そんな中にあるからこそ私たちは様々な不安な思いに駆られてしまうのです。次に何が起こるか、今度はどんなことがあるかと。私たちは平安な生涯を送りたいと思います。様々な問題や事柄に揺り動かされることのない、安心して満ちた平安な生涯を送りたいとそう願いつつも、現状を見ると、今、この日本の社会にあって、私たちが今生きているこの世界にあって、そのようなことは不可能ではないかと思ってしまうことがあるかもしれません。ある統計によると、先進国の一つの国にあって、今年、不安神経症やパニック障害にかかった人が人口の10%と発表されました。日本でも総人口の約3%がすでにそのように診断されているといえます。実際に、そのように診断されていなくても、多くの不安によって何もすることができないくらい、自分の人生を妨げられてしまう人がたくさんいます。その数を合わせると10%ではきかないといえます。私たちの生活が複雑になって行くほどに、私たちはより不安を抱いて行くのです。一つのことが崩れて行くと、雪だるま式にあらゆるものが崩れてしまうのではないかと、そんな恐れを抱くようになるのです。私たちはときに、人生が分からないゆえに、一寸先は闇であるゆえに、人生の中に起こってくる様々な予期せぬ出来事によって支配され、不安という底のない沼の中であえぎ続けるしかないという、どうしようもない存在に思えて仕方ないこともあるかもしれません。このような社会に生きている私たちに希望はあるのでしょうか？平安な生涯を送ることができる、そのような希望はあるのでしょうか？静けさに満ちた、穏やかさに満ちた、そんな人生を私たちは送ることができるのでしょうか？毎日毎日、私たちを襲う様々な不安から解放されて、喜びに満ちて生きることができるのでしょうか？

私たちは前回、昨年9/5にこのピリピ人への手紙4：4-9を学び始めました。ここで私たちはパウロがいう一つの断言を見ました。私たちに對するこれは確かであるという宣言です。パウロは言います。わたしたちは平安に満ちた生涯を送ることができる。私たちに分らない出来事が毎日のように襲ってくる、私たちが望んでいないような出来事が起こり続けるこんな社会にあって、平安に満ちて心身において穏やかな人生を送ることができるのだと宣言するのです。クリスチャンにはそれができる、平安な生涯を送ることができるその保障があるのです。これはみことばが約束していることです。いったいどのようにして平安に満ちた生涯を送ることができるのでしょうか？私たちはもうすでに4節と5節を見て来ました。パウロが教えようとするのは「平安に満ちた生涯を送るための条件」でした。今日は、この条件の3番目のことを見て行きますが、それによって私たちが平安に満ちた生涯を送るために何が必要なかをもう一度考えたいと思います。そして、それを通して神が約束されている、私たちが受けることができる、どんな世の中に生きていても、どんな不安なことが起こったとしても、その中で心穏やかに、揺るがされることなく、平安に満ちた生涯を送るそのすべを身に着けて行きたいと、そう願うのです。パウロはこのように言います。

4:4 いつも主にあつて喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

4:5 あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。

4:6 何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

4:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

4:8 最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。

4:9 あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。

4, 5節を見てから4ヶ月近く経っているのですが、大分忘れた方もおられるでしょう。私自身もこのメッセージを準備するその最初に、そのときのテープを聞いて何を語ったのかを思い起こしました。それで今日は、前回見たことをもう一度見直してから3番目の条件のうちの一つ目の要素を見て行きます。そして来週、3番目の条件の後半部分を見たいと思います。

☆平安に満ちた生涯を送るための必要条件

1. 聖書的喜びが平安をもたらす 4節

パウロは言いました。「4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」と。私たちが平安に満ちた生涯を送るためには、聖書的喜びというのが私たちの生涯の中になければいけないとパウロは教えました。聖書的喜びの定義を思い出して見ましょう。「聖書的喜びとは感情ではありません。喜びは神が信徒の最善のため、また、ご自身の栄光のために、あらゆる事柄を支配しておられるということ、そして、それゆえに、どのような状況にあっても、すべてが万全であるという根底からの確信です」。喜びとは確信であること、その確信とは、どんなことがあってもその起こることというのは神が私の最善のために為してくださることであり、それを通して神の栄光が最も現わされるから起こったのだという、そのことに対する確信です。だから、大丈夫だという確信なのです。このような喜びがあるときに、私たちは様々な困難に満ちた生涯にあって平安をもつことができるとパウロは言うのです。このとき、一人の人物を紹介しました。スパフォードというアメリカ人です。彼は非常に有名な讚美歌を書きました。「心安し、神によりて安し」…。彼は船の事故で4人の娘を同時に失いました。彼の妻だけが助かり彼女はスパフォードに「私だけが生き残った」と電報を打ちます。彼は妻に会うために急いでヨーロッパへ向けてアメリカから旅立ちます。その船上で船長は彼を呼んで「今まさに通っているここであなたのお嬢さんたちが乗った船は沈んでいったのです」と言いました。その知らせを聞いたスパフォードはそこでこの歌を書いたと言われているのです。彼は言ったのです「すべては万全である」と。それが「心安し」と訳されているところの実際的な箇所です。神はどんなことがあっても私にこのことを教えたと言います。あらゆることは万全である、神の計画のうちにあつてそれは良いことだと。彼は間違いなく悲しんでいましたが、その船上で言ったのです「けれども私は喜ぼう」と。たとえ自分には最善でないように思えても神が為していることは正しいことだから、私はそのことを知っているから、私は自分に言い聞かせる、心安らかだと。

人間の力でそのような喜びをもつことは非常に難しいこと、いや不可能です。なぜ、彼はその喜びを持つことができたのでしょうか？彼は喜びを与えることができる神を知っていたからです。神との和解をもっているゆえに、私たちには確信があるのです。私を懲らしめるために、私をさばくために神は不幸を起こすのではないこと、私の最善のためにしてくださっていることを知っているからです。それだけではありません。彼は知っていたのです。キリストが彼に平安を与えるというこのことを約束していることを。だから、彼はその約束に頼ったのです。また、彼はもう一つ知っていました。私たちのうちに与えられている聖霊が働かれるときに、私たちは喜びを生み出すことができる、御霊の実です。ガラテヤ5：22, 23「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」。パウロは言うのです。私たちが聖書的喜びをもつときに、どのような困難が起こったとしても、その中であつたとしても、私たちは神が常に私のために最善を為してくださり、神が自らの栄光を最大限に現わすためにこのことを為してくださっているという、その確信をもっているがゆえに言えるのです。「ありとあらゆることは万全だ、だから、私は喜ぶことができる」と。

2. 寛容な心が平安をもたらす 5節

5節に「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。」とあります。聖書的寛容というのは「他の人の手によって与えられるありとあらゆる困難に、忍耐をもって耐え忍ぶ」と、それだけでは不十分でした。この寛容というのは単に「私は我慢します」といって内側でじっと我慢していることではありません。神が求める寛容とはこの5節に命令されているように「寛容な心を…知らせなさい。」です。前回お話ししたのは、この「知らせなさい。」ということばは受身で書かれているということでした。つまり、パウロが言うのは、寛容な心をすべての人に「知られなさい」です。寛容な心があらゆる人の前に明らかになるようにしなさいと。どのようにしてでしょう？聖書は教えます。あなたの敵

に対して愛の行為を実践しなさいと。あなたの前に悪が凶られるときに、あなたの前にさまざまな嫌なことが起こされるときに、その人たちに対してあなたは悪をもって報いるのではなく、最善を行なって行きなさいと。「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」とパウロは言いました（ローマ12：18）。私たちがうちに苦々しい思いを持つのではなく、たとえ相手がだれであっても、どのような危害、困難を与える人であっても、どのような嫌な思いをさせる人であったとしても、私たちに求められていることは、もし、平安に満ちた生涯を送ろうと思うなら、私たちが持っているべきではないものは「寛容な心」なのです。うちに苦々しい思いをもっては平安などあるはずがありません。私たちの心の中でもうすでに戦が始まっていたら平安など起こりません。私たちはすべての人を愛するように命じられています、あなたの敵を愛しなさいとイエスは言われました。多くの場合、私たちは憎しみ、恨みをもちます。これ以上は我慢できないという限界を心の中に設けています。でも神は「そんな限界はありませんよ、わたしはあなたを愛したでしょう？その愛をもって愛さなければいけません」と言われます。

3. 人生のあらゆる事柄に対して正しい対応をすること 6節

6節にそのことが教えられています。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」。先ほど言ったように、ここには二つのことが語られています。一つは否定的なことであり、もう一つは肯定的な命令で表わされています。そして、この二つを合わせて、私たちが毎日の生活の中で抱える様々な問題、起こってくるありとあらゆる出来事に対して、どのように私たちが対応するべきなのかを教えてください。もし、私たちがその対応において失敗するなら、正しいことをしないなら、私たちは平安を持つことは非常に難しくなります。パウロは言います。もし、あなたがこのことをしっかりするならあなたは神の平安に満たされると。最初にお話したように、私たちの人生は様々な予期せぬ出来事に満たされています。私たちはいろいろなことを思い巡らします。自分の仕事、家族、学校のこと、結婚のこと、健康のこと、子どもたちのことなど、ありとあらゆることが私たちの心を支配します。それらに心を配ります。もしかすると、あなたはその後今晚の夕食は何にしようと考え、そのことに心配るかもしれません。そのことに余りにも心配るゆえに、もしかすると私が作る夕食はおいしくないから家族は食べてくれないかもしれないと心配るかもしれません。そういう人たちは実際にいます。そうするともう何もできない、食料を買いに行くこともできない、いろいろな心配に支配されてしまって先に進んで行けないのです。そのようなことはたくさんあります。細かい小さな事柄から大きな大切な事柄に至るまで、私たちの心は様々な気を配るのです。それゆえに、私たちはそのようないろいろな出来事に対して、どのように正しく対応することができるのかを考える必要があります。正しく理解しなければいけないのです。いったい、どのように正しく対応するべきか、その一番目を見ましょう。

(1) 何も思い煩わないで

これが最初の命令です。パウロは言います、心配、思い煩いは平安をもたらさないと。私たちは人生において正しい対応をして行くことが必要です。それによって平安が与えられるのです。パウロは、もしあなたが思い煩いを持っているなら、それは平安をもたらさないし、正しい対応ではないと言います。この箇所は皆さんよくご存じです。もしかすると、以前の私がそうであったように、皆さんもこの「**何も思い煩わないで**」ということばを見たとき、これは簡潔明瞭なことだから何も複雑なことを考えなくてもよいと思われるかもしれませんが、けれども、今回学びを始めて気付かされたことは「思い煩うな」ということに関して理解が足りなかったということです。ゆえに、ごいっしょに少し詳しく見たいと思います。「思い煩ってはいけない」とパウロは命じるのですが、私たちがそれを実践して行くなら、人生に起こる様々な出来事に正しく対応をすることができるのです。それは平安を私たちの心にもたらします。「思い煩わない」とはどういうことでしょうか？

まず、「思い煩うな」とパウロが命じることに、パウロが言っていないことを考えましょう。パウロは、私たちがあらゆる心配や様々な気遣いから完全に解放される、と言っているわけではないのです。時々私たちは誤解しています。「思い煩ってはいけない」と言われているから、どんなことでも心配してはいけないのだと考える、だから、何か心配事があると私は間違っただけをしていると思うかもしれないし、そのように心配している人に「あなたは間違っただけをしている」と責めるかもしれません。けれども、パウロはあらゆる心配や気遣いが無くなるとは言っていないのです。事実、ここで使われている「思い煩う」という動詞は、新約聖書に19回出てきます。マタイの福音書に7回、ルカに5回、両方ともイエスによって語られています。そして、Iコリントに5回、ピリピに2回、動詞の形で使われています。この19回使われている中で、パウロ自身が「心配している、思い煩う」と同じことばを使っているのを見ることができます。ピリピ2：19-20を見てください。「しかし、私もあなたがたのことを知って励ましを受けたいので、早くテモテをあなたがたのところに送りたいと、主イエスにあって望んで

います。:20 テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもないからです。」、パウロはピリピにテモテを送りたかった、テモテがそこに行って励ましを与えることを願っていたのです。なぜなら、パウロはピリピの人たちのことを「心配していた」のです。同じことば、同じ動詞です。テモテもピリピの人たちのことを心配していたのです。ここで使われていることばは、だれか、または何かに対する強い感情を表わしています。多くの場合に、否定的な意味で、つまり、悪い意味で使われるのですが、ピリピ2:20のように肯定的に良い意味で使われている場合もあります。人生のいろいろな出来事に対する心配り、心配、気遣いを、パウロは「思い煩ってはいけない」ということばをもって否定しているわけではありません。「心配」自体は間違っただけのものでも、罪深いものでもないのです。事実、Iコリント12:25を見ると「それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。」と、この「いたわり合うため」と訳されていることば、これが「思い煩う、心配」ということばと同じ語源をもった名詞です。パウロが言うことは、からだの中に、つまり教会の中に分裂がなく、教会にいる一人ひとりが互いに心配り合い、気遣い合い、心配し合うためだと、これは命じられていることです。ですから、私たちが最初に理解しなければいけないことは、パウロは「あなたは心配をもってはいけません」と言っているのではないということです。心配することが必要なときがあるのです。私たちは気遣い合わなければなりません。相手のことをいたわろうとしなければなりません。他の人の必要をどのように満たすことができるのかと考えていなければいけません。私たちははっきりとこのことを理解しなければなりません。あらゆる心配がいけないわけではないのです。心配には良い心配と悪い心配、しなければいけない心配としてはいけない心配があるのです。

2番目にパウロが言っていないこと、それは私たちが人生の様々なプレッシャーから解放されるということです。「思い煩うな」ということは、私たちの心を締め付けるようないろいろなプレッシャーから解放されるということを言っているのではないのです。これも、パウロが非常に興味深いことを言っています。IIコリント11:23-28「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。:24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、:25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。:26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、:27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。:28 このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。」、パウロは自分が体験した様々な肉体的困難、迫害、試練を列挙しています。その後でパウロは「教会への心づかいがあります」と言っています。この「心づかい」が同じことばです。パウロが言っていることは、私は様々な困難をキリストのために受けて来た、肉体的な患難が私の上にあった、それはとても辛いものだった、けれども、それと同じくらい、いやそれ以上に私には心遣いがあった、救われた人に対する心遣いがあった…です。パウロには眠れないほどの心遣いだったのでしょう。コリントの人たち、ピリピの人たちのことを考えて。様々な偽教師たちがやって来て、その教えになびいていたガラテヤの人たちのことを考えて…。パウロは言います。「思い煩ってはいけない」、それは私たちが人生の様々なプレッシャーから全く解放されることではないのです。正しい気遣いをもっていても、そのようなプレッシャーを感じることはあります。眠れぬ夜を過ごすことがあるかもしれません。子どものことを思い、愛する人のことを思い、私たちはどのようにその人を助けることができるのかと、祈りつつ眠れない夜を過ごすことが度々あります。パウロはそれを禁じているのではないのです。そのようなことはあるとパウロは言います。そのようなプレッシャーから思い煩わなくなったら解放されると言っているのではないのです。

では、パウロは「思い煩ってはいけない」と言って私たちに何を命じているのでしょうか。先ほど言ったように「思い煩い」には良い種類のもの悪い種類のものがあります。パウロはその悪い方を禁じているのです。いったいパウロが言う「思い煩うな」とはどういうことだったのでしょう？禁じられているので、これは明らかに肯定的なものではありません。だから、兄弟姉妹に対する気遣いを止めなさいと言っているのではないことは明らかです。では、どのようなことを禁じているのでしょうか？どういったときにこのことばが悪い意味で使われているのでしょうか？いくつかの例を挙げると分かり易くなるので見てみましょう。

たとえば、ルカ10:38-42に皆さんよくご存じのマルタとマリヤの話が出てきます。マルタは給仕に一生懸命だったのです。マリヤはイエスの足元でその話を聞いていました。そこで、イエスはマルタが「:40 主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」と言うことばに答えて、このように言います。「:41 マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。:42 しかし、どうしても必要なことはわずか

です。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。」と、マルタは間違っただけの思い煩いをしてたのです。マリヤは正しいことに心を配っていたのです。正しいこととは、イエスが語るみことばに耳を傾けることでした。マルタがしていたことは、この世にあった様々な事柄に思いを巡らせていたのです。マタイ13章、これも皆さんがよくご存じのとえ話です。四つの場所に種が落ちるのですが、その一つ、いばらに落ちた種がありました。イエスはこのたとえを解説して22節でこのように言われました。「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」、同じことばが出てきました、「この世の心づかい」です。この人は福音を聞くけれど、みことばが一瞬目を出すかもしれないけれど、みことばにしっかり根ざすのではなく、この地上のいろいろなことに思いを配るゆえに実を結ぶことができないのです。もう一つ、Iコリント7:32-34でパウロはとてもおもしろいこのことばの使い方をしてしています。結婚について話をしています。「あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。:33 しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、:34 心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。」、パウロはここで結婚するなど言っているのではありません。文脈から明らかにパウロは結婚をすることについて話をしています。パウロはここで二つの心の配り方、正しい心配りと間違っただけの心配り、正しい思い煩いと間違っただけの思い煩いを教えています。何が正しい思い煩いなのかと言うと、それは「どうすれば主に喜ばれることか」と心配することです。間違っているのは、神以外のことに思いがいてしまうがゆえに、神が求めていることが何かかということの思い巡らすのではなく、この場合は自分の妻だったのですが、この地上の事柄に心配りそれに思いを寄せるために「心が分かれる」こと、それが問題なのです。

パウロが言っていることは、もし私たちがだれかが何かに余りにも思いを寄せるゆえに、正しい焦点を失ってしまうなら、それを止めなければならないということです。問題は私たちがこの地上のことに思いを寄せてしまうことであり、それだけに思い捉われることであり、神が求めているあらゆる良いことから目をそらすことです。妻のために心配することは悪いことではありません。それはすべきことです。しかし、それをするが余りに、正しい焦点を失ってしまい、心が不安に満たされ、そこから身動きできなくなってしまうなら、私たちの心は明らかに「分かれて」いるのです。多くの場合、人々は自らの成功、自らの容姿、そのような様々な外見的な事柄に思いを寄せて、どのようにしてそれを達成することができるのかということに焦点を当てようとします。そのような事柄に私たちが捉われてしまうなら、私たちは段々と成功するために何をしなければいけないのかということを考えるようになり、失敗を恐れるようになり、いろいろなことに不安を抱くようになります。どうでもいいようなこの世のことに思いを寄せてしまっただけで神が求めていることができなくなってしまうなら、それがパウロが言っている「思い煩い」なのです。神が求めていることは神が命じている正しいことをすることです。それに心配することは正しいことなのです。パウロが言うのは、この地上での生活において、私たちが余りにもそのことに集中しそのことに思い巡らすゆえに、私たちが捉えられてしまった、動くことができないと思わなければいけないことは何ひとつないということです。

この4:6の原文において最も強調されていることは「何も」ということばです。何もありませんと言います。動詞だけを見ると「思い煩いなさい」という動詞です。それがなぜ否定形になるかと言うと、「何もない」ということが最初のことばに付けられているのです。つまり、思い煩うことべきことは何もない、だから、思い煩ってはいけなさいと言うのです。集中しすぎて神から焦点をそらしてしまうことは何一つないのです。イエスは山上の説教の中で私たちに同じことを教えています。思い煩ってはいけなさい。マタイ6:25-34で、食べ物や着る物や住むところについて話をしていますが、イエスが言われることはそのようなことではなく、人生のあらゆることについて思い煩う必要はないということです。なぜでしょう？神があなたのことを心配してくださるからです。「:25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。:26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。:27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。:28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまなさい。働きもせず、紡ぎもしません。:29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。:30 きょうあっても、あすは灰に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。:31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。:32 こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみ

なあなたがたに必要であることを知っておられます。:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」、空の鳥を見なさい、あなたはそれよりすぐれているでしょう？神はあなたのことをもっと愛しているでしょう？**「あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられる」**のです。私たちはパウロが言っている命令をよく考えないといけません。それに焦点を当てなければいけません。

パウロは言います、私たちは思い煩ってはいけません。ある一人の聖書注解者はこのようなことを記していました。これはマタイの箇所を受けて言っているのですが、「イエスは私たちに心配するなど命じています。そして、それははっきりと思い煩うことが罪であることを私たちに教えています。心配をする、この世のことに思い煩いを抱くクリスチャンは、実に神に向かってこう言っているのです。『神様、私はあなたがいいことを言ってくれているのは分かっているのですが、あなたが実際に私のことを心配して、私のために最善を為してくれるなんてとても思えません』、だから心配する、思い煩うのです。」と。その人はこのように厳しく言います。「不安、思い煩い、それは神の愛と神のみ力に対するあからさまな不信行為、反逆行為だ」と。不安、思い煩いは私たちの焦点を神から遠のけて行きます。この世の事柄に私たちが焦点を当ててしまうのは、明らかにそれは罪なのです。不安、それは精神心理学上の問題ではありません。ほとんどの場合、それは神に対する不信です。なぜなら、あらゆることは私たちの益のために為される、神はそのように言われるからです。

皆さんの中で、殺人を犯すことは罪でないと思う人はいないでしょう。それは心の中で罪を犯すことも含めてそう思っているからです。「死んでしまえ」と思ってもかまわないと思っている人もいないでしょう。なぜなら、イエスはそれを罪だと言われるから。週に3回位までなら赦されると思っている人もいないでしょう？なぜなら、神がそう言われるからです。心の中で兄弟を憎むなら「死んでしまえ」と言うならそれは罪だと言うのです。それならなぜ、私たちは少し位思い煩うのはOKだと思うのでしょうか？真剣に考えるべきです。神は言われます「思い煩うな」、わたしに焦点を当てなさいと。

どのようにして私たちは神に焦点を当てのでしょうか？どのようにして思い煩いを解消して行くのでしょうか？次週、その答えをパウロのことばを通して見て行きます。